

2023年9月3日佐土原キリスト教会礼拝説教**聖書箇所：マタイ福音書5章9節****説教題：平和をつくる人**

8月27日、S姉が召天になられました。大変なご病気でしたが、4か月半もご病気と立派に戦われ、見事に天の御国に凱旋して行かれました。ご遺族は、ご葬儀で「4か月半、お祈りによって神様に支えられました」とお話し下さいました。共に礼拝していた素晴らしい仲間とお別れすることは、私達も寂しいですが、ご遺族は本当に辛い時をお過ごしのことと思います。ご遺族の皆様の上に、主の慰めを共に祈らせて頂きましょう。

私は、葬儀の司式をさせて頂き、ご遺族のお辛さは承知した上で、天国の希望を語らせて頂きました。私が語ることが出来るのは、それだけなのです。最近、森繫さんの歌の一部が不思議と口をついて出て来ます。こんな歌詞です。「思い出に生きる、それはあり得ない、ただ前にだけ、進むだけ、昨日は、もう昔、戻れない、帰れない、進だけ、前にだけ、ただ進むだけ」。思い出はとても大切です。私達の生涯の宝です。私達を支えてくれます。しかし実際問題、私達は、後戻りは出来ない、前にしか進めないのです。しかし、前に、前に進み、歳を重ね、どうなるのでしょうか。天の軍勢が待ち受け、イエス様が抱き留めて下さる、その幻がなければ、前に進むことは空しい、というか恐怖ではないでしょうか。S姉が天に凱旋され、天では主が、溢れる程の慰めと喜びを与えておられる、そのことに触れさせて頂き、私達も天を見据えて、前に進んで行きたいと思ったことです。重ねて、ご遺族の皆様のためにお祈りをさせて頂きましょう。

さて7月最後の「水曜集会」でマザー・テレサの動画を参加者で視ました。マザー・テレサは、皆さんが良くご存じの通り、インドのコルカタで本当に大きな働きをした人ですが、彼女をあのよう働きに突き動かしたのは、1つの祈りの言葉だったと紹介がありました。それは、アッシジのフランシスコの祈りです。「主よ、私を、あなたの平和の道具として用いて下さい。憎しみのある所に愛を、争いのある所に和解を、分裂のある所に一致を、疑いのある所に真実を、絶望のある所に希望を、悲しみのある所に喜びを、暗闇のある所に光を、もたらすことが出来ますように、助け導いて下さい…。この「主よ、私を、あなたの平和の道具として用いて下さい」、この祈りの言葉が、彼女の人生を貫く祈りだったようです。

全世界のクリスチャンと呼ばれる人々が、この祈りを自分の祈りにしたなら、そこに生きたら、世界は、私達の社会は、確実に変わるのではないかと、そんなことも思ったことでした。

さて、昨年2月にウクライナ戦争が始まり、既に1年半が過ぎています。戦地では、一般の民衆を巻き込んだ悲惨な戦いが続けられているようです。その影響は日本にも大きくあり、「日本も国を守るために—(日本の平和を守るために)—防衛費を増やさなければならぬ」という論調が声高に叫ばれるようになりました。そして、政治の舞台では、実際に防衛費が2倍になるような方向に動き出しています。そのような大事なことが、私達の手の届かないところで決められて行くのを感じます。しかしそうであっても、クリスチャンには国の歩みについて祈って行く重荷が与えられています。政治家が国の歩みの方向を直接的には決めて行くとしても、私達は、国の動きを注視して、私達の国が良い歩みをする事が出来るように、神の導きを、神の憐れみを、祈って行きたいと思うことです。

さて、イエスは「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから」(9)と言われました。イエス様の当時も「平和をつくる者」というのは、もしその言葉が使われるとするならば、それは、力によって、権力、武力によって、相手をねじ伏せて、そこに「戦争の無い状態を作り出す」、そういう特別な権力者のことを言いました。ローマ皇帝のような権力者です。ドラマでも、色々な暴力があると—(水戸黄門のような)—力のある英雄が出て来て悪い奴をやっつけて、暴力を納めてしまう、その人が崇められる、それと同じです。しかし「平和をつくる者」という言葉がそのようなレベルの話だとするなら、それは私達から遠い話になります。

しかしイエスはこの言葉を誰に語られたのか。ご自分の周りにはいる弟子達や群衆に語られたのです。集まって来た力無い人々に、です。「群衆」という言葉から「素人」という言葉が生まれました。イエスは、権力者でも、神殿の指導者でもない、平和の素人、普通の人々に、「あなた方は平和をつくり出すのだ」と語られたのです。その意味でこの言葉は、普通の生活をしている私達に語られている言葉ではないでしょ

うか。では、イエス様は、この言葉にどのようなメッセージを込めておられるのでしょうか。

現実の戦争の原因を一言で言うことは難しいでしょう。私には、その知識も見識ありません。しかしある神学者は言いました。「あらゆる争いは、結局、自分を第一に考える利己主義から生じる」。ユネスコ憲章には「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とあります。ウクライナ戦争の原因もそうではないでしょうか。あるいはそこに「憎しみ」や「報復」といった感情も加わるのでしょうか。「民族主義(ナショナリズム)」もある意味で罪の姿だと思います。そう考えると、平和を妨げているのは、その一番の問題は、結局、人間の中にある「罪」だということになるのではないのでしょうか。

「平和」という言葉は、ヘルブ語では「シャローム」という言葉です。「相互関係において調和がある」という意味の言葉です。人の罪がその調和をどのように破壊するのか。それは、戦争というような大きなことを取り上げなくても、私達は身近な人間関係において良く知っていることだと思います。ある本にこうありました。「中学校の先生 1000 人のうち 150 人が生徒から暴力をふるわれたことがあり、3 人に 1 が生徒に恐怖感を覚えているそうです。他方『教育』の名の下に堂々で行われる教師の暴力におびえている子ども達も、少なくありません。職場では足の引っ張り合い。昇進を祝うのも表向きだけ。陰に回れば、ねたみ、中傷。仲間の失敗をひそかに願う…家庭も学校も職場も平和ではありません」(内田和彦)。私は小学校を 5 校回りましたが、ある学校では朝から職員室で激しい言葉が飛び交っていました。陰で「俺はあいつが嫌いだ」と言っている先生もいました。私達は平和な国に住んでいると言っても、「では平和に生きているか」というと、そうでないという現実があるのではないのでしょうか。人間の社会は平和でないものに満ちている。いやその前に、私達の心が平和でないものに満ちている。人間は、一方で平和・平安を願います。それなのに、私達の心に、回りに、「平和でない状況」があるのです。私達の中に「私には争いが無い、争う心がない、怒りもない、裁きもない、内も外も平和に満ちている」と言い得る人がいるのでしょうか。そういう時もあるかも知れないけれど、一旦何かがあると、穏やかではいられないのが私達です。

だからこそ、まずそういう現実に向かってイエスは言われるのです。「平和をつくる者は幸いです」(9)。「まずあなたの心に、あなたの周りに、『平和をつくる者になりなさい』」。国の歩みは政治家が決めると申し上げましたが、しかし「国の外交力は、国民 1 人 1 人の民度の総計だ」という言葉も聞きました。つまり国民 1 人 1 人が本当は何を願っているのか、どう生きているのか、それが、結局は国を動かす、ということでしょう。だからこそ、1 人びとりの心に平和をつくるのが大切なのです。

しかし、どうすれば私達は自分の周りに、いや自分の心に、平和を獲得出来るのか、「平和づくり」が出来るのか。「ヤコブ書」は言います。「何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか」(ヤコブ 4:1)。私達の中に「戦う欲望(罪)」がある、「私達は平和を壊すものを持っている」と言います。ある「信仰問答」は、「私達は—(人間は)—すべて生まれながらに憎むようにしかかかっていない」と言います。三浦綾子さんは言います。「何気なく言う悪口、陰口…その心の中にとぐろを巻いているのは、敵意、ねたみ、憎しみ、優越感…ではないか…だが人の悪口を言ったことのない者はいないだろう。私達は 1 人残らず罪深いのだ」(三浦綾子)。私達は、本質的に争う欲望、憎しみを持っているという。だとしたら、自分の力ではどうにもならないということではないのでしょうか。どうすれば良いのか。

「シャローム」とは「相互関係の調和」という意味だと言いましたが、それ以上に意味するのは、「神との関係の調和」です。ヘルブ語で「シャローム」と挨拶する時、それは「神の祝福が、恵みがありますように」という意味です。そして聖書は「人が罪を犯し、神から離れ、神との調和—(平和)—を失った時に、横の人間関係に亀裂が生じた」と教えるのです。だからまず、神との関係が回復されなければならない。アダムとエバの話は、「私達の横の関係—(人間関係の平和)—は、縦の関係—(神との平和)—がどれほどしっかりしているか、そこに掛かっている」と教えるのです。マザー・テレサのグループは、毎朝 4 時 30 分から礼拝をして、神様との関係をしっかり持とうとします。それがないと、人に仕えることが、人との間に平和の心を持って接することが出来ないのです。かつて日本軍の捕虜になったイギリス人宣教師が言いました。「『平和をつくる者』とは『祈ることによって神との平和をつくる者』だ…平和についてデモ

をすることにも意味があるだろう。しかし、神との平和を求めず、その結果、身近な人との平和も得ることが出来ないまま世界平和を論じたり、あるいはただ怒りに駆られて行動したところで、果たして本当に平和をつくることができるのだろうか。祈ることによって神との平和を得、自分中心から神中心になった人が、ここにも1人、あそこにも1人と増えていき、地の塩となることが、この世界に平和をもたらす具体的な方法だ」(スティーブン・メティカフ)。その意味で私達が「シャローム」を獲得するには、まず神との間に平和を持つことが大切なのではないのでしょうか。

では、私達は、どうやって神との間に平和の関係を持てるのでしょうか。メカティフは「祈ることによって」と言いましたが…。「アメージング・グレース」という歌があります。作ったのはジョン・ニュートンという人です。彼は、若い頃、奴隷船の船長だったのです。アフリカで奴隷を買って、それをアメリカやイギリスに運んで売ったのです。彼のお母さんは熱心なクリスチャンでした。でも彼は思っていました。「たとえ神がいたとしても、俺のような奴は神に受け入れてもらえないはずがない」。でもある日、彼は嵐に遭います。死ぬかも知れないと思ったその時、彼は初めて祈るのです。「神様、助けて下さい」。その時、彼は神の声を聞くのです。「あなたを愛している。あなたを助ける」。「俺のような奴でも赦して、愛してくれるんですか」。彼はびっくりしたから「アメージング・グレース/驚くばかりの恵み」という歌を作りました。彼は、ただ神に罪を、全てを、赦されて神との平和の関係を持ったのです。神との平和の関係を持つというのは、ジョン・ニュートンだけではない、誰も同じです。ただ神に全ての罪を赦されて、神に受け入れてもらうということです。「自分が、ただ一方的に赦されている」ということを心に刻むことです。そして、自分の欠けが、罪が、赦されるために、神の子であるイエス様が、私達の全ての罪を背負って十字架に掛かって死んで下さった、死んで私達が神に至る橋を架けて下さった、そのことを心に刻むことです。そして「私はあなたに罪を赦されてここにいます」と遜って言うこと、「神様、こんな者を赦して、受け入れて、愛して、良くして下さい、ありがとうございます」と言うことなのです。その時—(使徒パウロは教えます)—「信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています」(ローマ5:1)と言うことが出来るのです。そこに立った時、その信仰は私達に、平和づくりの動機と力をくれると思うのです。「この罪ある自分が、それでも赦され、神に愛されている」という思いが、平和をつくり出す前提ではないかと思えます。

1つの証を読みました。先住アメリカ人(インディアン)のシャイアン族の族長、メノナイトのクリスチャンの証です。1968年、オクラホマ州のシャイアン族の町は、その100年前、合衆国の第七騎兵隊がシャイアン族の村を攻撃して虐殺した「ワシタの戦い」の100年記念を祝うことになりました。町の人達が決めたことです。町の人達は、無邪気というか、「その100年記念を祝うためにシャイアン族の人達を招きたい」と言って来たのです。シャイアン族にしてみれば、自分達の村が破壊され、女性や子供が殺された辛い出来事です。祝う理由はありません。シャイアンの族長達は相談しました。そして「町の人達は善意から自分達を招いている」と信じ、「町の博物館に陳列されているシャイアン族の1人の遺骨を埋葬することを赦して欲しい」という条件で参加することにしました。

記念会の当日、呼び物は「ワシタの戦い」の再現でした。他所から来た人々の中に第七騎兵隊の孫たちがいました。本物の軍服に身を整えて、本物の武器やサーベルを持って第七騎兵隊の孫達は、昔そっくりに作られたシャイアンの村の攻撃に参加しました。村のテントの中には、シャイアンの子供達がいて、討たれる役をします。証をしている人の子供もテントの中にいました。彼は、騎兵隊に対する憎しみが沸いて来るのをどうしようもなかったのです。ようやく全てが終わり、シャイアンの人々は、100年前に虐殺された人の遺骨を埋葬しました。その棺を担いで行進をしている時、1人のシャイアンの婦人が自分の美しい肩掛けを脱いで、棺を覆いました。次に、シャイアン族の人々が、自分達から榮譽を受けるべき人に、先程の肩掛けを渡すことになっていました。族長達は誰に渡すか相談しました。人々は、恐らく州の知事か役人が選ばれるだろうと思っていました。ところが、選ばれたのは「合衆国陸軍第七騎兵隊の子孫」の司令官だったのです。子孫の代表の現役の大尉がやって来て、剣を抜いて礼をし、剣をさやに収めると、族長が大尉の肩に榮譽の肩掛けを掛けたのです。

第七騎兵隊によるシャイアン族の虐殺の100年後、シャイアンの族長達は、自分達が受けた過去の傷、

罪を赦し、騎兵隊の子孫達に和解の手を差し伸べたのです。その行為の重要さが分かった人々は、シャイアン族の人も、町の人も、騎兵隊の子孫も、そこに泣き崩れたのです。お互いに肩に顔を埋めて、泣いたのです。戦いを記念する場が、平和を祈念する場が変わったのです。このシャイアン族の多くがクリスチャンだったという理解で、私はこれを読んだのですが、これが平和づくりではないでしょうか。

ただ押さえておきたいことは、イエスは「神との関係を持てばそれで良い」と言われたのではないのです。(初めに帰りますが)「神の助けを頂いて、平和をつくる者になれ」と言われました。アメリカでは『福音的だ』、『聖書的だ』と言われているクリスチャン達が国の戦争を積極的にサポートして来た」という現実があります。かつて大虐殺が起こったルワンダという国は、国民の90%がクリスチャンでした。人口の90%がクリスチャンの国で大虐殺が起こったのです。イエスは言われました。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(ルカ 9:23)。イエスは平和の生き方に徹し、十字架を負い、死なれましたが、しかし神の力によって復活し、平和に生きる者の勝利を見せて下さいました。だから神と関わる者は『平和の生き方』の十字架を背負って従い歩く—(大きなことは出来ないでしょう、しかし周りの人間関係において平和を求める十字架を背負い歩く)—あとは神に任せる、そのことが大切なのだと思います。

具体的には、色々なことがあるでしょうが、53歳で召された牧師は、最後の日々、このように日記に書いています。「『私は平安を与える者であったか』、『私はだれかにほほえみをもたらしたか』、『いやすことばを語ったか』、『怒りをやり過ぎたか』、『人を許したか』、『人を愛したか』...主が平安(平和)を下さったことの実は、だれかに平安(平和)を少しでも与えることである。私の残された日々も、そういう1日1日でありたい」(片岡伸光)。「私も神に赦され、日々神に赦されている」、そういう砕かれた心になり、そこから出る、「私は平安を与える者であったか」、「私はだれかにほほえみをもたらしたか」...そういう生き方が出来れば、具体的な赦しと愛に踏み出せばと、願うことです。そして家庭で、職場で、様々な人間関係において、子どもとの関係においても、小さな平和をつくり出す、その努力を続けることが出来ればと願います。その上で、神に示されるなら、導かれるなら、この地に主の平和を実現するために、そしてこの国が主の御心に適う歩みが出来るように、小さな祈りと、小さな努力を、続けて行きたいと願います。その時、私達も「神の子ども」、つまり「神に似た者」と呼ばれるのです。主が呼んで下さるのです。